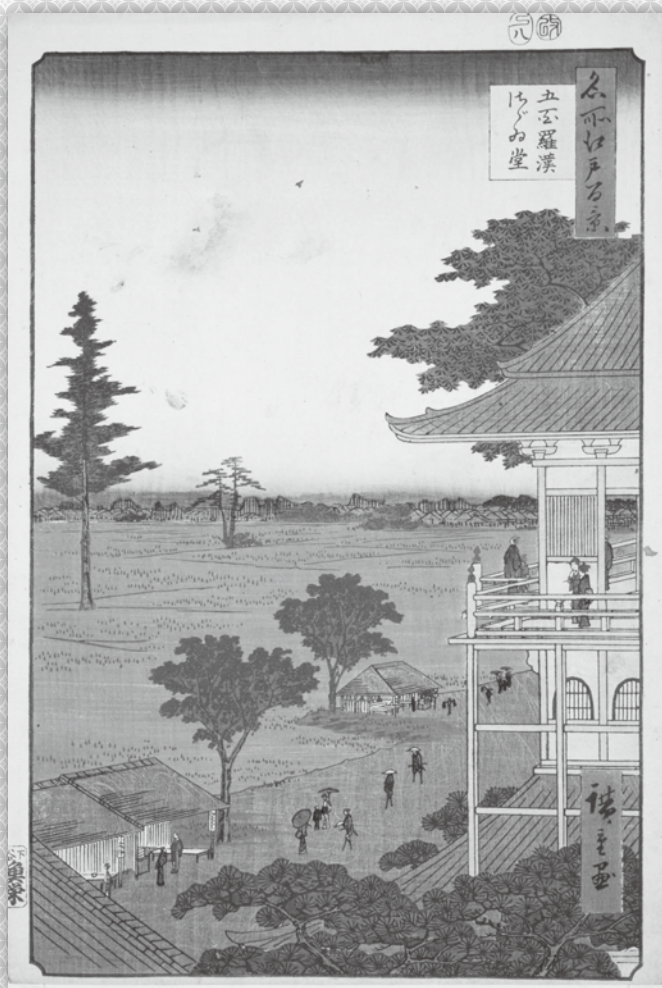


平成28年度 文化財保護強調月間

歴史と文化を 考えよう



広重「名所江戸百景 五百羅漢さぶらゐ堂」
(国立国会図書館デジタルコレクション)

下町文化

NO. 275
2016.9.28

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.jp/>

- 文化財保護強調月間
歴史と文化を考えよう
・民俗芸能大会・文化財講演会
・東京9区文化財古民家めぐり
・江東区伝統工芸展
- 江戸前の歴史を語ろう
史料に見る「江戸前」とは？2
- 古写真の中の江東
八幡堀と八幡橋
- 森下文化センター2階
「工匠館」リニューアルオープン
- 区役所2階 情報ステーション
平成27年度所蔵資料の展示

文化財との出会い

いよいよ秋本番ですね。文化、スポーツ、読書、さらに食べることなど、何をするにも良い季節です。教育委員会では、10～11月の期間を文化財保護強調月間と銘打って、江東区の歴史や文化を一人でも多くの方に知っていただくため、文化財の公開事業を実施いたします。

江戸時代に仕事や祭礼から生まれ、伝えられた民俗芸能の公開、昔から受け継がれた伝統的な技を公開する伝統工芸展、江東区に関わる歴史をやさしく紐解く文化財講演会、都内9区が連携し古民家を紹介する文化財古民家めぐりなど、内容は多岐にわたります。ちなみに、当区には、区内で唯一の江戸時代の古民家旧大石家住宅があります。期間中はより詳しい資料や関連のスタンプを置く予定です。さらに、他区の古民家にも足を運べば、造作の違いなどもわかり興味深いと思います。

また、8月2日にリニューアルオープンした森下文化センター2階には、^{たぐのや}工匠館があります。こちらでも伝統工芸作品、あるいは技術について知ることができしますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

民俗芸能大会

10月16日(日)

会場 都立木場公園

〔午前11時～12時30分〕

場所 木場公園内入口広場

木場の角乗

東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師(川並)は、鳶口一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

〔午後1時～3時50分〕

場所 木場公園内ふれあい広場

木場の水遣

木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を操る時、お互いの息を合わせるため、歌われた労働歌です。

木場の水遣念仏

木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子

砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社(現葛飾区葛西神社)の神官が百姓に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞

富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男鬘に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深山の力持

深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。



文化財講演会

入場無料

〔江東区の近代建築について〕

―建築遺構を中心に―

区内には、明治以降に建てられたレンガ造の歴史的建造物とともに、関東大震災以降に建てられた鉄筋コンクリート構造の歴史的建造物もあります。街並みが移り変わるなかで、こうした歴史的建造物の価値や意味について、内田青藏氏(神奈川大学教授、江東区文化財保護審議会委員)にお話していただきます。

日時 11月11日(金)

午後6時30分～8時30分

会場 江東区教育センター1階

大研修室(江東区東陽2-3-6)

定員 150人(先着順)

東京文化財ウィーク 2016
「東京9区文化財
古民家めぐり」

古民家めぐり

期間 10月1日(土)～11月30日(水)

都内9区(足立・板橋・江戸川・北・江東・杉並・世田谷・練馬・目黒)が参加して、文化財となっている古民家を紹介します。東京区政会館(千代田区飯田橋3-5-1)1階では、10月5日(水)～27日(木)の期間に「みる・しる・たのしむ 古民家の保存と活用」と題した展示を行います。

江東区内には、江戸時代の民家建築である旧大石家住宅が、仙台堀川公園内(南砂5-24地先)に保存されています。

公開日 土曜日・日曜日・休日

時間 午前10時～午後4時

※旧大石家住宅は、屋根の葺替工事のため、12月1日(木)～平成29年3月31日(金)の間は休館となります。



会場 ●都立木場公園(木場4丁目)入口広場・ふれあい広場

交通 ●東京メトロ東西線「木場駅」下車徒歩5分
●都営地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・都営地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
●都営バス 葉10 [とうきょうスカイツリー駅前～新橋] 木場4丁目下車

江東区伝統工芸展

入場無料

日時 10月29日(土)～11月3日(木・祝) 午前9時30分～午後5時

※最終日は午後4時まで

会場 深川江戸資料館 地階レクホール(江東区白河1-3-28)

本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ

区無形文化財保持者による実演・体験を行います(左日程表参照)。また今回、特集として江戸指物(山田嘉内)

を取り上げます。ぜひご覧ください。

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

技の体験(実費がかかります)

午前10時～正午
午後1時～3時
左日程表のうち、
の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください。



実演公開日程表

日程	技術	保持者
10/29 (土)	庖丁製作	吉澤 操
	手描友禅	和田宣明
	べっ甲細工	磯貝 實
	染色補正	丸田常廣
	無地染	近藤良治
10/30 (日)	建具	友國三郎
	江戸指物	山田一彦
	刀剣研磨	臼木良彦
	相撲呼出し裁着袴製作	富永 皓
	あめ細工	青木 喜
	江戸切子	小林淑郎
	すだれ製作	豊田 勇
	木彫刻	渡邊美憲
10/31 (月)	帯製作	杉浦正雄
	建具	友國三郎
	あめ細工	青木 喜
11/1 (火)	江戸指物	山田一彦
	相撲呼出し裁着袴製作	富永 皓
	ふすま櫓・ふすま椽	鈴木延坦
	あめ細工	青木 喜
11/2 (水)	刀剣研磨	臼木良彦
	江戸指物	山田一彦
	江戸切子	小林淑郎
	あめ細工	青木 喜
11/3 (木・祝)	紋章上絵	亀山晴男
	刀剣研磨	臼木良彦
	江戸指物	山田一彦
	表具	岩崎 晃
	あめ細工	青木 喜
	鍛金	佐生明義
	更紗染	佐野利夫・勇二

(順不同・敬称略)

※都合により変更する場合があります。ご了承ください。

の技術は体験ができます。申込みは当日会場で。

深川江戸資料館 一案内図



会場・深川江戸資料館への交通

- 東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車 A3出口 徒歩3分
- 都営バス門33系統「清澄庭園前」下車 徒歩3分
- 都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車 徒歩4分

史料に見る「江戸前」とは？・2

前々号の『下町文化』273号で紹介した「江戸前」の続きです。前回は、江戸前の海は三面に砂洲が広がっていたこと、幕府による範囲の問いに対して文政2年（1819）に日本橋肴問屋が品川洲崎の一番棒杭と深川洲崎沖の松棒杭を見通した線の内側と答えたこと、享保15年（1730）の漁場争論の史料中で船橋浦（千葉県船橋市）が、貝ヶ澤（江戸川の澤）の西側一円を江戸前と主張したことを紹介しました。

一般的には、肴問屋の回答範囲が本来的な「江戸前」の範囲と考えられますが、船橋浦の主張も興味深いため、争論の史料をもう少し掘り下げて江戸前の範囲について考えてみることにします。

船橋浦に見られる「江戸前」の範囲が当時一般的であったのか否か。本紙273号でも取り上げた、貝ヶ澤の東側は船橋浦で、その西側が「江戸前」との見方は同浦の主張で、この史料が猫実・堀江の両村（千葉県浦安市）との争論に関わるものである点をも考慮すると、江戸前の範囲を貝ヶ澤まで広げるのは難しいかもしれないと述べました。『江戸東京学事典』の「江戸前」の項には、「漁師仲間には仲間内での江戸前の定義があつたらしい」と記されていますが、船橋浦の主張もそのひとつと言えるでしょう。

船橋浦の見方が漁師仲間で一般的であったか、その点については不明ですが、別の史料に正徳5年（1715）と天明2年（1782）に幕府裁許がくだり、西は大森村（大田区）前の一

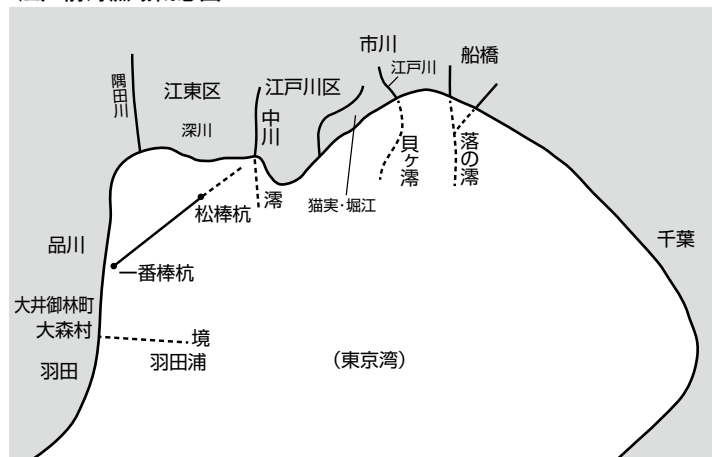
棒杭（品川洲崎の一番棒杭のことと思われる）、東は貝ヶ澤までが江戸前浦々の入会（共同利用）範囲と定められたとの記述があります。

この記述が盛り込まれた史料とは、幕末の安政元年（1854）に深川獵師町8ヶ町に中島町・蛤町・奥川町を加えた深川11ヶ町が南葛飾郡7ヶ村（江戸川区）、東葛飾郡2ヶ村（千葉県浦安市）を相手取り、貝巻漁をめぐって争った一件の内済（和解）証文です（『品川区史 続資料編（二）』所収）。

訴えた深川浦は、江戸前とその周辺での当時の漁業は「潟獵職」（網類・長縄・鉤職の総称）と「貝巻獵」に大別でき、前者は江戸内海諸浦による広域的な入会、後者は村の前海での漁であったといえます。そして、先に述べた大森村前の一棒杭から貝ヶ澤まで

の範囲は、江戸前浦々の入会場であるとしたうえで、その江戸前浦々の働き場のうちへ、南・東葛飾郡村々が肥漁（田畑の肥料にする貝採り）と称して、中川澤を西に越えて入り込み、深川などの沖にある出洲、間之洲で貝巻獵を働くうえ、獵具は籠の目を細く割った竹で塞ぎ、稚貝まで獲るため、貝類がなくなり、潟命に及ぶと主張しています。深川浦は、田畑の肥料にする貝獵は、それぞれ村前の海面で行うもので、両郡の村々に中川澤の東側で漁をするよう掛合つても、聞き入れてもらえず訴えに及んだようです。

江戸前海漁場概念図



海岸線・図中の位置関係はあくまでも目安

この一件は内済となり、深川浦の主張は認められませんでした。同浦は葛飾郡の村が中川澤を西に越えて江戸前浦々の働き場に入り込んだことを問題視したことがわかります。さらに、内済にあつて、「東宇木田村」（江戸川区）が深川浦に差し出した証文を、同村に差し戻しています。その文面には、「中川澤より東之方ニテ肥巻漁可致」とあり、今後は中川澤の東側で貝獵を行い、西側には入り込まないことを深川浦に約束したようです。

深川浦の主張を参考に検討すると、①中川澤から貝ヶ澤の間は、各村々の貝漁場であり、江戸前浦々の広域的な貝漁場でもあったこと、②中川澤の西側から大森村前の一棒杭までは、江戸前浦々が独占する貝漁場であったこと、の2点が考えられます。おそらく、深川浦の「江戸前」認識は、後者の中川澤西側までとみることができるといえるでしょう。もともと、貝ヶ澤迄は、地元各村々の働き場であったものが、天明2年の幕府裁許で江戸前浦々の働き場としても公的に認められたと理解できます。ちなみに、日本橋肴問屋は松棒杭の東側を「下総海」と認識していたようです。獵師による江戸前の範囲について興味は尽きません。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

八幡堀と八幡橋

江東区域は、江戸時代以降、埋め立てが行われて現在の姿となりました。また開発に伴い、私たちが目にする風景も日々変化しています、その一方でかつて目にした風景の中には無くなり、記憶から薄れ消え去っていくものもあります。

そのような中、変化する風景は、様々な機会に撮られた写真に記録されています。それらは町の歴史等を知る事ができる貴重な資料の一つです。今回は、昭和30年（1955）頃の八幡堀とそこに架かる八幡橋の写真を取り上げ、様々な視点から当時の様子などを見ることにします。

1. 八幡堀

八幡堀は、富岡八幡宮（富岡1）の東側にある堀であり、八幡宮の北側を通る油堀の支川です。その歴史は、元禄14年（1701）に三十三間堂（富岡2付近）が建てられた頃に八幡宮に附属する堀として油堀と共に造成されたと考えられます。元禄12年「江戸大絵図」では付近は未開発の洲浜ですが、宝永5年（1708）に刊行された「分間江戸大絵図」には八幡堀が描き込まれています。



①八幡橋

さて、①の写真には、筏に組まれた材木が写っています。昭和30年前後の住宅地図を確認してみると、写真右側に建ち並ぶのは、材木置場・倉庫であったことが当時の地図から確認できます。また、川幅の半分を材木が占めています。船が運航できるようになっています。こうした堀に筏が浮かぶ風景は、貯木場が移転する前には江東区内の堀や川などで見られ、木場を有する江東区ならではといえます。

2. 八幡橋

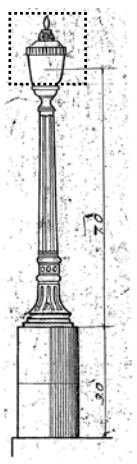
①の写真の奥には、八幡橋が架けられています。この八幡橋は明治11年（1878）に現在の中央区京橋の楓川に架けられ、その後昭和4年（1929）に現在地へ移された東京で最も古い鉄橋であり、国の重要文化財に指定されています（「下町文化No.266」を参照）。

このように八幡橋は戦前からの形を残す橋ですが、昭和30年頃に写された写真（②）では現在見るものとは少し違った姿を見る事ができます。端にある親柱には、ポール状のものがそびえています。これは照明灯の柱であり、



②八幡橋 両端にあるのが親柱

昭和4年に現在地へ橋が移設された時の図面（③「震災復興橋梁図面901枚」（江東区指定文化財）より）で確認され、上部には照明が設けられていたことが見られます（③）。しかし、照明の設備（③点線部分）は、昭和30年前後までには撤去されたようです。



③八幡橋の図面（親柱部分）

さらに現在では、照明灯の柱も撤去されています（④）。これらの写真・

図面から八幡橋も時代と共に姿を変えていることがわかります。



④八幡橋の親柱現在の様子

3. 八幡堀跡

最後に現在の様子（⑤）はどうでしょう。八幡堀は、昭和四十九年の首都高速道路九号線の建設に伴い油堀と共に埋められ、堀跡は緑道公園として整備されました。この時期には既に新木場への貯木場の移転が始まりました。



⑤八幡橋 現在の様子

一方、堀沿いにある建物も倉庫からマンションなどへ変わりました。

こうして八幡堀は埋められました。が、緑道公園へ整備された時に試掘調査が行われました。調査の結果、貨幣（寛永通宝）、陶磁器や瓦の破片などが発見されました。これらは、かつての八幡堀を偲ぶ遺物ともいえます。

（文化財専門員 功刀俊宏）

「工匠館」リニューアルオープン

江東区の職人（無形文化財）に関する展示を行う工匠館。展示の主役である職人とは、長い間、人から人に伝えられ、磨かれてきた伝統的な技を受け継ぐ方々です。工匠館は、そんな「職人の世界」を知ることのできる常設の展示施設です。

このたび、展示内容を一新し、職人の仕事場の再現に加え、仕事場模型も併せて展示いたしましたので、ぜひ二度お立ち寄りください。

今回は、2部屋を

使って職人の世界を表現しました。エレベーターを降りて、廊下

に奥の部屋に入ると、そこには職人の技

術の高さを示す作品が展示されています。も

う一つはエレベーターを降りてすぐ右にある

部屋で、ものづくりに

加え、木場や船大工の技を中心に紹介し、そ

の歴史についても解説

しています。

それでは、はじめに奥の部屋の展示について簡単に紹介いたしまし

※（一）内は技術名



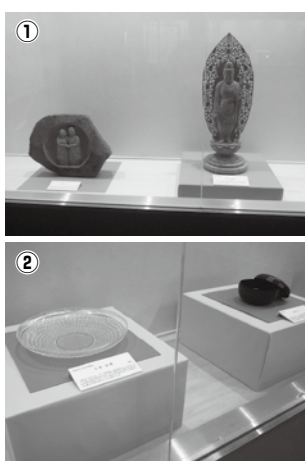
左側



右側

伝統的な技術を知る

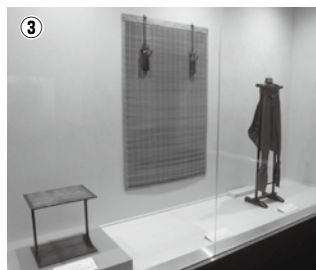
まず、部屋の左側にあるケースに展示した作品は、①石を刻み込んだ道祖神（石工）、木に細かい細工を施した仏像（木彫刻）、②クリスタルガラスにさまざまな文様を刻んだ平皿（江戸



①

②

切りこ、木ではなく石膏で作った型に布や和紙を貼り重ね、型抜きしたものに漆を塗り重ねた



③

乾漆の菓子器（漆芸）、③細かいホゾを組み合わせた花月棚（指物）、等間隔で編み込んだ簾（簾製作）、特徴的な形で相撲には欠かせない相撲呼出し裁着袴です。

つづいて、正面にある2つの展示ケースと、右側のケース左端に、合わせて3着の着物を展示しました。文化

財の対象は、着物自体ではなく、そこに

描かれた絵柄・色彩で、

いずれも染織の技術に

分類される

更紗染、手描友禅、無地染です。

④更紗染は複数の型紙を用いて染

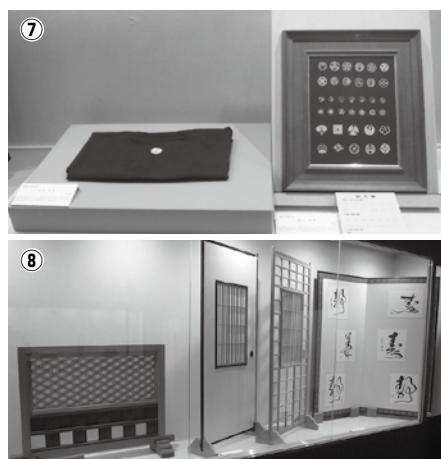
め重ねる型染め、⑤友

禅は糊で滲みを防ぐ防

染技術を施したものの

し筆を使って描き、⑥無地染は反物を

ムラなく染める技術です。



⑦

⑧

最後に、右側のケースですが、⑦注文に応じて描き上げる家紋（紋章上絵）、⑧組子細工など細かな技術を施した衝立（建具）、木を削り、溝を組み合わせた襖（襖槽・襖椽、寸分のズレもなく貼り込んだ屏風（表具）を展示しました。

この部屋の展示作品は以上です。

さて、このような作品を作る職人さんの技術が無形文化財（工芸技術）といえます。文化財の対象は、職人さん自身ではなく、作品を製作するための技術で、職人さんは技術の保持者として認定されます。

この部屋に展示された作品は、すべて区指定・登録無形文化財保持者として認定された職人さんが製作したものです。細部まで手の込んだ作品を通して、技術のすばらしさを体感してください。

こちらの展示室では、職人の技と歴史についてご紹介しています。

江東区に残る伝統工芸の技は、江東の歴史と深い関わりがあります。

天正18年

(1590)に

江戸入りした徳

川家康は、江戸の建設のために、集めた職人を日本橋あたりに住ませました。そして、江戸が広がっていくなかで、深川や小名木川・大横川などの堀沿いの地が町場となり、職人や商人が移り住むようになります。

とくに、寛永18年(1641)の大

火により、木置場が日本橋から元木場(現佐賀・福住あたり)に移り、木置場で働いていた職人や、木材を用いる職人も一緒に移ってきたことが、江東区に多くの職人が住むようになった理由でした。

「木場と職人」



コーナーでは、木場移転の歴史や、木場内の筏師「川並」、材木を挽いた「木

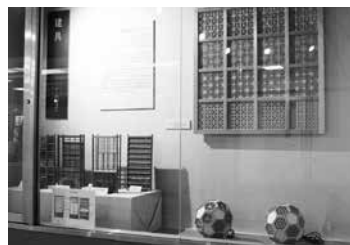
挽」が用いた道具を展示しています。また古写真や『木場名所図絵』で当時の木場の様子をご紹介します。

木場の周辺では、材木を用いる木工・漆工関係の職種が發展しました。

「漆芸」コーナーでは、漆について

の解説のほか、漆器や漆刷毛を展示しています。また「建具」コーナーでは、

建具見本(縮尺十分の一)や組子細工の作品を展示しています。



江東区内を縦横に走る掘割を活用した職人も多くいました。江戸時代、小名木川沿いには船大工が多く住み、海辺大工町と町名がつけられました。海辺大工町には関東内陸から運ばれてきた荷物を扱う奥川船問屋が寛永の頃(17世紀初め)にできるなどターミナルとしての役割があり、たくさん船が小名木川を通っていました。

「船大工」コーナーでは、和船づく

りについてご紹介しています。和船は板材を組み合わせる「棚板づくり」です。そのため棚の合わせ目から水が浸入しないように加工する必要があります

す。船大工は板の合わせ目をノコギリで



すつて荒らし(すり合わせ)、さらに「巻ハダ」(ヒノキなどの皮を加工したもの)を打ち込んで防水加工をほどこします。「すり合わせ」は船大工の重要な技の一つとされます。展示された独特な船大工の道具をご覧ください。

また、大鋸や台カンナもあわせて展示しています。これらは15世紀なかばに發明された道具です。大鋸により製材がたやすくなり、さらに平面をなめらかにする仕上げ道具として台カンナも發明されたことで、木を選ばずに板材が生産され、大量に供給されるようになりました。この技術革新が和船づくりの背景であったのです。



染織や江戸切子なども掘割を活かして發展しました。かつては堀で染め物を洗い流す姿が見られました。切子職人は掘割が材料の運搬に便利のために集まってきました。

「江戸切子」コーナーでは、代表的な文様カットをご紹介します。江戸切子は、天保年間(1830)

44)に作られ始めたといわれます。明治に入りグラインダーを用いたカット方法が導入され、現在のような多彩な文様を鋭く深いカットで表現するスタイルが確立しました。江戸切子では伝統的に色のない透ガラスを用いますが、近年では色の付いた被ガラスもさかんに用いられています。

展示室の奥には、原寸大の「仕事場」が再現されています。森下2で仕事をしていた唐木細工職人の仕事場です。唐木とは黒



檀・花梨など東南アジア産の硬い木材です。釘を使わない指物の技術で座卓や棚を作ります。この他、縮尺十分の一で作られた仕事場模型も展示しています。伝統の技が發揮された場をじっくりとご覧ください。

ココにも歴史があった

平成27年度所蔵資料の展示

当文化財係では、「こうとう情報ステーション」(区役所2階)のミニ展示コーナーにおいて、江東区教育委員会所蔵の歴史資料を月ごとにご紹介しています。展示品は区民の方々からいただいた民俗資料を主体に、区内から出土した埋蔵文化財や古写真、絵葉書なども交えています。ここでは、平成27年度に実施した12回の展示(表参照)のうち、3回分について振り返りたいと思います。

【たばこパッケージ】(第4回)

第32回夏季オリンピック東京大会の開催5年前にあたる7月に、日本専売公社(現JTB)が昭和38〜39年に発売した「ピース」「オリンピック」(たばこ)の第18回夏季オリンピック・第2回パラリンピック東京大会記念パッケージを展示しました。本資料は当時の社会状況を知る代表的な資料と言えます。



【絵葉書「豊洲石炭埠頭」】(第8回)

東京中央卸売市場が中央区築地から豊洲に移転(開場)する予定のため、開場1年前にあたる11月(展示当時)に「豊洲石炭埠頭」の絵葉書(昭和25年頃東京都発行)を展示しました。豊洲市場のある豊洲6丁目には昭和20年頃〜41年に埋め立てられ、石炭や電気、



ガス関係の埠頭が存在していました。市場や学校、劇場など埋め立て当初とは違う土地利用がなされ、変貌著しいこの地域の歴史の一端を窺い知る資料といえます。

【和菓子木型】(第9回)

展示資料は、区内の和菓子店2店(白河2丁目・南砂5丁目)で実際に使用していた和菓子の木型です。現在、木型を彫る職人は全国的にみても少なくなっています。見事な彫りは美術的観点からもすばらしく、また、地域史の観点からも大事な資料と言えます。

今年度も様々な展示を予定しておりますので、ご来庁の際にはぜひご覧ください。



平成27年度 こうとう情報ステーション展示内訳

回	展示品	回	展示品
1	火熨斗・炭火アイロン・電気アイロン 各1点	7	徳利(近世 ^{※2} ・近代) 各2点
2	都電・行き先表示板 1点	8	絵葉書「豊洲石炭埠頭」 1組
3	焼継を施した陶磁器 ^{※1} 11点	9	和菓子木型 5点(鯛・菊2・鶴・亀)
4	東京オリンピック・パラリンピック関係たばこパッケージ 7点	10	行火・ハクキンカイロ 各1点
5	蚊やり豚・蚊取り線香(パッケージ) 各1点	11	台付羽釜 1点
6	飯櫃・電子炊飯器 各1点	12	統制食器 ^{※3} 4点(碗3、おろし器1)

※1：北砂2-1 地点出土資料 ※2：千田遺跡出土資料(釘書き) ※3：No.12 遺跡(北砂2-15) 出土資料